

<農産> 7月中旬～8月中旬の農作業のポイント

この時期は、『ばれいしょ、豆類、てんさい』の重点防除時期です。

ほ場をしっかりと観察し適期防除を行いましょ。

1. ばれいしょ

○疫 病（塊茎腐敗）

着蕾期以降、降雨後に低温（20℃以下）で推移する気象条件は、疫病の発生を助長します。降雨が続くと急速にまん延する恐れがあるため、引き続き予防的防除に努めましょ。なお薬剤選定に当っては、耐性菌出現を避けるため、異なる系統の薬剤でローテーション防除を行いましょ。

塊茎腐敗は、茎葉の疫病菌が落下して土壌中に侵入し、塊茎に感染し発病します。疫病に効果があっても塊茎腐敗に効果が無い薬剤があるので注意しましょ。

○軟腐病

軟腐病は高温・多湿条件で多発します。気象予報に注意し、発生前～初期防除を徹底しましょ。特に地面に接している葉が感染しやすいため、茎葉の過繁茂や倒伏に注意しましょ。また、疫病防除と同様に系統の異なる薬剤でローテーション防除を心がけましょ。

○夏疫病

7月中旬頃から下葉に発生し、しだいに上葉に及び、8月中旬頃からまん延します。病斑に同心円状の輪紋（暗褐色～黒褐色）ができ、その裏面に黒色せん毛状のかびを生じるのが特徴です。

2. てんさい

○褐斑病

例年7月中旬には初発が確認されますので、速やかに防除を開始しましょ。また、小麦の収穫時期は防除作業が遅れがちになるので残効の長い薬剤を選択しましょ。

☆てんさい褐斑病の効果的防除法☆

- ① 防除農薬の散布開始時期は初発直後までとし、遅れずに散布する。
- ② 高温多湿（多雨）条件では散布間隔は10日以下とする。通常条件下でも14日を超えると防除効果が劣るため注意する。
注） DMI 剤（ホクガード乳剤）とカスガマイシン剤は、耐性菌が道内各地で発生。DMI 剤、カスガマイシンを含む銅水和剤（カスミンボルドー）は、各1回の使用に限定する。
- ③ 8月下旬で散布を終了すると、その後に発病が急激に進展する場合がありますので注意する。

○葉腐病

7月中旬頃に初発、8月上旬～9月中旬にかけて被害が拡がります。

発病は気温20℃、湿度95%以上が30時間以上続いた場合に激しくまん延します。

3. 豆 類

○菌核病、灰色かび病

菌核病および灰色かび病は、過繁茂で風通しの悪い状態で発病しやすく、開花後の日照不足および多湿条件が続くと多発します。

防除開始のタイミングは、下記を参考に適期を逃さず防除を行いましょう。

大豆	開花始後 10～15 日目に第1回散布	} その後は 10 日毎に大豆は2回、小豆・菜豆は3回防除を実施しまししょう
小豆	開花始後 7～10 日目に第1回散布	
菜豆	開花始後 5～7 日目に第1回散布	

※開花始は、ほ場全体の5%の株に花が咲いた時期です。

○大豆の「マメシクイガ」及び「カメムシ類」

マメシクイガ・カメムシ類の被害

マメシクイガは子実がえぐられたような食痕（口欠豆）となり、カメムシ類では、未熟莢を吸汁加害することで生じる子実の刺し痕が問題となる。

防除体系

- ① 莢伸長始（およそ半数の株に2～3cmに達した莢）を確認する
- ② 莢伸長始の6日後を目処に1回目散布する
- ③ 10日後に2回目散布する



○小豆の「マキバカスミカメ」

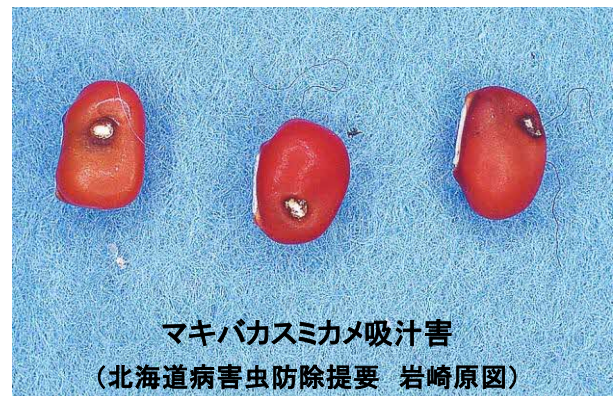
マキバカスミカメの被害

8月上旬以降、未熟莢から吸汁し、粒の品質を低下させる。ばれいしょ、てんさい、小豆畑で発生が多い。

防除適期

- ◎開花始（開花した株が全体の5%）から積算気温 515～520℃（開花始 25～26 日前後）に達する時期

平年 8月18日頃



農薬の飛散・中毒防止を心がけましよう。農薬使用の際は、「令和3年度農作物病害虫・雑草防除ガイド」（青色の冊子）を参照し、対象作物・使用倍率・総使用回数・使用時期を十分確認し、間違いの無いように使用しまししょう。